

日本の海は、海洋生物地理学的にインド-西太平洋区（熱帯区・亜熱帯区）、東亜区（温帯区）・北太平洋区（亜寒帯区・寒帯区）の3地理区に属しているが、東亜区はさらに暖温帯区・中間温帯区・冷温帯区に区分される。従って日本近海の海岸を含む浅海（水深200m以浅）における海洋生物は、熱帯から温帯、寒帯までのこの7帯区に分布している。このような背景から日本列島の各所では多様な生物分布が見られ、南北および日本海側と太平洋側の地域間には特異的な動物相が展開している。

本県の生物地理区は、島根半島日御碕を起点に南北に分けるように北側は中間温帯区、南側は暖温帯区の動物相が展開しており、島根県の海域にはそれぞれの海区の北限と南限の生物が共に分布していることになる。日本海は地球史的に成立してからまだ時間が短いため、一般的には生物多様性は他の海域に比べて低いとされるが、高温、高塩分の対馬暖流の影響を受けて、暖流系種の分布は太平洋側よりも高緯度まで広がっている。このように島根県の沿岸域は海洋生物地理学的特殊性が存在する。

国立環境研究所は、近年の海水温上昇に対応して日本の温帯域でサンゴ分布が北へと拡大している証拠を示し、その拡大速度が14km/年に達していることを明らかにしている。一方で、海洋生物の多くは生活史の中で海流に乗って移動が可能である事、さまざまな環境的要因によって10~20年の周期で変動する一次的な“擬集団”か、明らかに“土着”の種群であるかの確認が必要な事、この点が今回のレッドデータブック掲載種として選定する重要なポイントになっている。

本県のサンゴ類は対馬暖流の影響が強い隠岐諸島、島根半島の岩礁域を中心に、八放サンゴの仲間であるヤギ目のイソバナやウミカラマツ、六放サンゴの仲間であるイシサンゴ目（非造礁性および造礁性）が透明度の高い海域に生息している。これまでの学術的調査によって明らかにされた隠岐諸島、島根半島日御碕地区のイシサンゴ目は8科19種に及ぶ（幸塚 2006）。ピワガラシ科フタリピワガラシ、ミドリイシ科ニホンアワサンゴ、アミメサンゴ科アミメサンゴ、ベルベツトサンゴ、チョウジガイ科アオチョウジガイモドキ、センスガイ科ツボセンスガイ、ニイノタコアシサンゴ、キクメイシ科キクメイシモドキ、キサンゴ科ジュウジキサンゴ、

キサンゴ、ヘンペイキサンゴ、ナガイボキサンゴ、イボヤギ、タバネイボヤギ、ムツサンゴ、ツボサンゴ2種(未同定)、シオガマサンゴ科ジュズサンゴ、シオガマサンゴである。このうち造礁性イシサンゴ類はニホンアワサンゴ、アミメサンゴ、ベルベツトサンゴ、キクメイシモドキの4種で、塊状~被覆状の生息が確認されたのみで、これらの種は生息群体数も少なく散在的な分布を示す個体群であり、内湾の浅海域あるいは外洋に近くても水深の深い環境に局所化する傾向が認められる。これらのイシサンゴ類は本県が生息北限と考えており、他の造礁サンゴ種よりも低水温や濁りといった厳しい環境条件下で生息できる耐性を持っていると推定される。

今回選定した八放サンゴ類のイソバナはやや広範囲に分布が見られる比較的安定した種であるが、水深2~10m以内の浅海にも生息していることから容易に採集され、ネット通販による売買など人為的な影響を特に受けて近年生息数が激減している。また堤防建設、港湾浚渫作業等の海事工事、油汚染や漂着物によりその生息域が脅かされる危険性があることが選定した理由である。

六放サンゴ類のニホンアワサンゴ、イボヤギ、ムツサンゴの3種は、透明度の高い海域に見られることから、海洋汚染の指標生物として選定した。ニホンアワサンゴは本県が北限、ムツサンゴはシオガマサンゴとともに日本海北部に分布する種であることから、本県が南限と考えていることが選定理由である。イボヤギは広範囲に分布が見られる比較的安定した種であるが、イソバナと同様に採集などによる人為的な影響を受けやすく生息数が減少している。

隠岐諸島および島根県沿岸域は、日本海特有の海洋現象がこの海域に生息する温帯域の生物に与える影響は非常に大きい。南からの対馬暖流と北からのリマン寒流の勢いの強弱による海水温度変化、冬の季節風の吹き出しによる深海の冷水湧流の影響など、不安定な環境の中で、常に生息が脅かされるギリギリの状況の中で生き続けていると思われる、10~20年の周期でかれらを見守っていく必要がある。島根県沿岸部のサンゴ類の生物地理学的研究は非常に乏しく、今後の調査次第では生息種の増加や生息域が拡大する可能性が多大である。特に、外洋から遮蔽された小さな湾や入り江、外洋に近くても水深が深く波浪による海中の攪乱の影響を受けない環境域におけるさらなる調査が期待される。

(秋吉英雄)

サンゴ類掲載種一覧

計4種

準絶滅危惧 (NT)

- ・イソバナ
- ・ムツサンゴ

○ニホンアワサンゴ

- ・イボヤギ

計4種

【記号説明】

- ・：カテゴリー区分変更なしの種 (3種)
- ↑：上位のカテゴリー区分への変更種 (0種)
- ↓：下位のカテゴリー区分への変更種 (0種)
- ：新規掲載種 (1種)
- ◇：情報不足からの変更種 (0種)
- ◆：情報不足への変更種 (0種)

【掲載順の準拠文献等】

原色検索 日本海岸動物図鑑 I 保育社

準絶滅危惧 (NT)

花虫綱八放サンゴ亜綱ヤギ目イソバナ科

イソバナ

Melithaea japonica

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):秋吉英雄



選定理由

比較的浅海の潮の流れが良い外洋に面した岩壁に生息していることから、シュノーケリングなどで容易に採集されやすい。生体および加工品の売買などによる人為的な影響を特に受けやすく近年生息数が激減している。また堤防建設、港湾浚渫作業等の海事工事、油汚染や漂着物によりその生息域が脅かされる危険性がある。

概要

紅色、朱色、黄色など色の変化に富み、高さ、幅ともに20cmまでの一平面状で、しばしば癒着して網状の扇形の群体を作る。ポリプは枝の両側と上面に配列し、花夾の中に完全に退縮する。日本海側における生息域は、男鹿半島以南から九州南西部の岩礁壁にみられる。

参考文献

秋吉英雄 (2002) 海辺の博物学 島根県海辺の生物たち. 42pp. (財)島根ふれあい環境財団21. 海中公園センター (1973) 島根県海中公園学術調査報告書. 76pp. 波部忠重 (1971) 大社町日御碕沿岸の無脊椎動物相. 日御碕海岸海中公園調査報告書: 31-38.

県内での生息地域・生息環境

潮の流れがはやい岩礁壁、水深2—10mのところで集団の群生を作って生息している。

存続を脅かす原因

人為的な採集および海岸域の埋め立ておよび生活廃水などの流出による海水の汚濁。漂着ゴミによる生息環境の悪化。

(執筆者: 秋吉 英雄)

準絶滅危惧 (NT)

花虫綱六放サンゴ亜綱イシサンゴ目ミドリイシ科

ニホンアワサンゴ

Alveopora japonica

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	—	準絶滅危惧 (NT)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):安部和人(隠岐の国ダイビング)



選定理由

生息群体数も少なく散在的な分布を示す個体群で、内湾の浅海域あるいは外洋に近くても水深の深い環境に局所化する傾向が認められる。日本海においては隠岐諸島が生息域の北限と考えられる。

概要

群体は半球状で10cm以下の小型の塊状、ポリプは通常は緑色を呈している。水深10—20mの岩礁域に生息している。

参考文献

野村恵一・梶村光男・内田紘臣 (1994) 隠岐諸島における造礁性イシサンゴ類について. 海中公園情報, (106): 7-11. 杉原 薫・園田直樹・今福 太郎・永田 俊輔・拒宿 敏幸・山野 博哉 (2009) 九州西岸から隠岐諸島にかけての造礁サンゴ群集の緯度変化. 日本サンゴ礁学会誌, 11:51-67. 波部忠重 (1971) 大社町日御碕沿岸の無脊椎動物相. 日御碕海岸海中公園調査報告書: 31-38.

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島では、外洋から遮蔽された小さな湾や入り江、外洋に近くても水深が深く波浪による海中の攪乱の影響を受けない環境域に生息する。島根半島においては10m以深の比較的浅い海藻群落中に出現する場合もある。

存続を脅かす原因

比較的深所に分布しているが、冬の季節風の吹き出しによる深海の冷水湧流の影響による海水温度変化に加え、波浪や潮流への耐性は低い。

(執筆者: 秋吉 英雄)

準絶滅危惧 (NT)

花虫綱六放サンゴ亜綱イシサンゴ目キサンゴ科

イボヤギ

Tubastraea foulkneri

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):秋吉英雄

島根県固有評価

—

環境省カテゴリ

—



選定理由

水深2-10m以内の浅海に生息していることから容易に採集されやすい。ネット通販による売買など人為的な影響を特に受けやすく、近年生息数が激減している。また堤防建設、港湾浚渫作業等の海事工事、油汚染や漂着物によりその生息域が脅かされる危険性がある。

概要

群体は塊状で1cm前後の円筒形のサンゴ個体が並んでおり、全体の大きさは径10cm以下が多い。褐虫藻を持たないので、岩陰に生息することが多い。群体の色は赤色、橙色、黄色が多い。日本海側における生息域は、本州中部以南に普通に見られ、地域変異が多い種である。

参考文献

幸塚久則・秋吉英雄(2006) 隠岐の島周辺海域から採集された浅海産非造礁性イシサンゴ類。日本生物地理学会会報。61:53-66。
野村恵一・梶村光男・内田紘臣(1994) 隠岐諸島における造礁性イシサンゴ類について。海中公園情報。(106):7-11。
波部忠重(1971) 大社町日御崎沿岸の無脊椎動物相。日御崎海岸海中公園調査報告書:31-38。

県内での生息地域・生息環境

潮の流れの速い外洋の岩礁壁から内湾の岩陰までさまざまな環境に集団で群生して生息している。隠岐諸島では傾斜した岩盤一面に大集団で生息する箇所が見られる。イソバナとよく混雑して生息している。

存続を脅かす原因

人為的な採集および海岸域の埋め立ておよび生活廃水などの流出による海水の汚濁。漂着ゴミによる生息環境の悪化。

(執筆者:秋吉 英雄)

サンゴ類

準絶滅危惧 (NT)

花虫綱六放サンゴ亜綱イシサンゴ目キサンゴ科

ムツサンゴ

Rhizopsammia minuta mutsuensis

カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
—	準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)

撮影者(提供者):幸塚久典

島根県固有評価

—

環境省カテゴリ

—



選定理由

生息群体数も少なく散在的な分布を示す個体群で、内湾の浅海域の岩の割れ目や海藻類の根本の岩盤上に局所化する傾向が認められる。陸奥湾が模式産地で、日本海側における生息域はこれまで若狭湾以北の日本海沿岸に生息する北方種であったが、隠岐諸島が生息域の南限と考えられる。

概要

群生性に岩礁域で見られ、薄い根様で連結された円筒形の群体を形成しており、共肉および触手とも鮮やかな黄色をしている。比較的浅い海域の平坦部のあまり日の当たらない薄暗い場所に見られることもあり、ホンダワラ類が生育する仮根周辺にも生育している。

参考文献

幸塚久則・秋吉英雄(2006) 隠岐の島周辺海域から採集された浅海産非造礁性イシサンゴ類。日本生物地理学会会報。61:53-66。
野村恵一・梶村光男・内田紘臣(1994) 隠岐諸島における造礁性イシサンゴ類について。海中公園情報。(106):7-11。
波部忠重(1971) 大社町日御崎沿岸の無脊椎動物相。日御崎海岸海中公園調査報告書:31-38。

県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島では潮の流れのはやい岩礁壁で水深5-10mのところに群生しているが、生息地は限局している。

存続を脅かす原因

南からの対馬暖流と北からのリマン寒流の勢いの強弱による海水温度変化、沿岸域の堤防の設置や埋め立てなどの漁港の整備・拡張に伴う生息環境の破壊が懸念される。

(執筆者:秋吉 英雄)

絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足



サンゴ類

絶滅
野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

進絶滅危惧

情報不足